



Sous le Soleil de Satan: Georges Bernanos

紀田順一郎 荒俣宏
責任編集



悪魔の陽の下に

昭和五〇年六月一日印刷　昭和五〇年六月一五月初版第一刷発行

著者——ジョルジュ・ベルナノス

訳者——木村太郎

発行者——佐藤今朝夫　発行所——株式会社国書刊行会

東京都豊島区巣鴨三—五—一八　郵便番号一七〇　電話〇三—九一七—八二八七　振替東京六五二〇九

造本——杉浦康平＋鈴木一誌

印刷——セイユウ写真印刷株式会社＋凸版印刷株式会社　製本——凸版印刷株式会社

定価——二、三〇〇円

●落丁本・乱丁本はおとりかえします

木村太郎きむらたろう

一八九九年、東京生れ

東京大学文学部卒、現在

南山大学名誉教授

専攻 フランス文学

主要著訳書

『死生』 春陽堂 一九四〇年

『詩と信仰』 公教社 一九四九年

『コルネイユ』『ポリウクト』

岩波書店 一九二八年

クロオデルナリヴィエール

『信仰への苦悶』 甲鳥書林

一九四二年 平凡社『世界教養

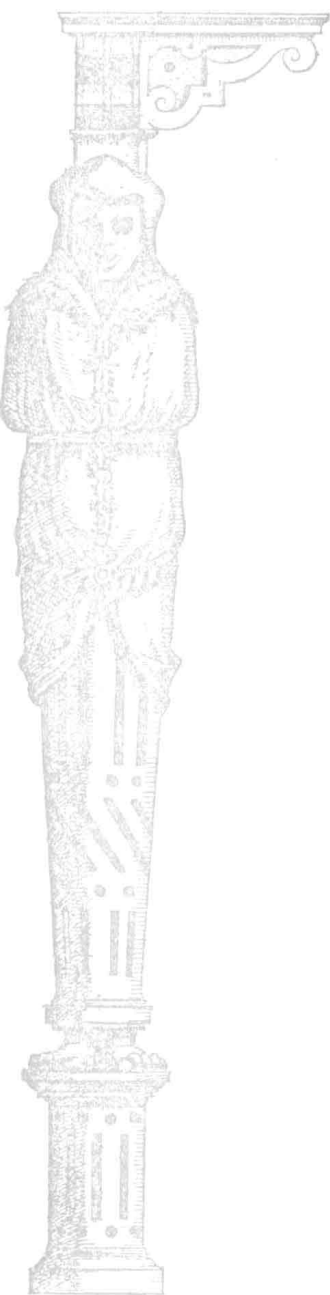
選集』第三巻 一九七五年

クロオデル『マリアへのお告げ』

甲鳥書林 一九四三年

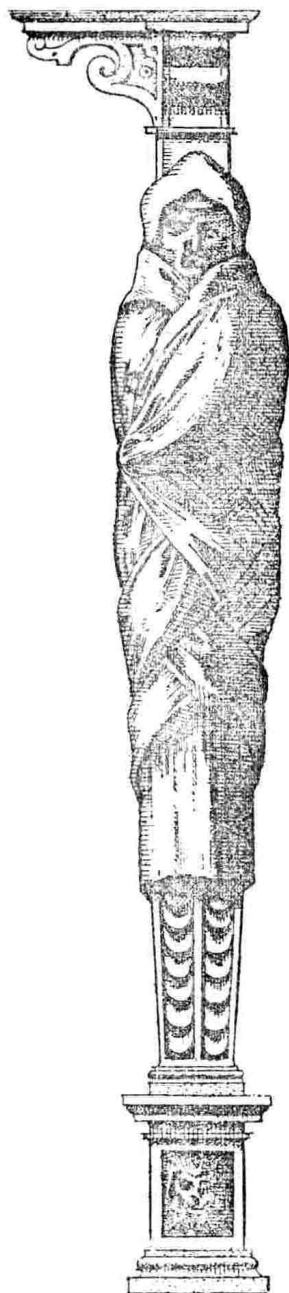


世界幻想文学大系——第十一卷



悪魔の陽の下に ジョルジュ・ベルナノス——木村太郎訳

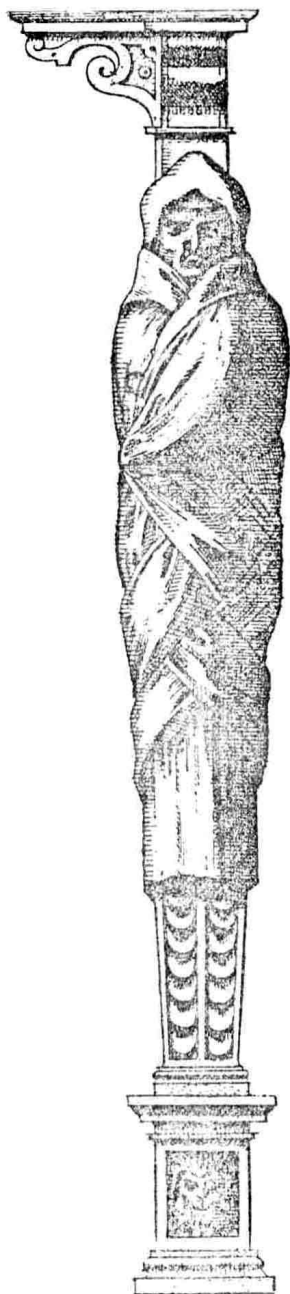




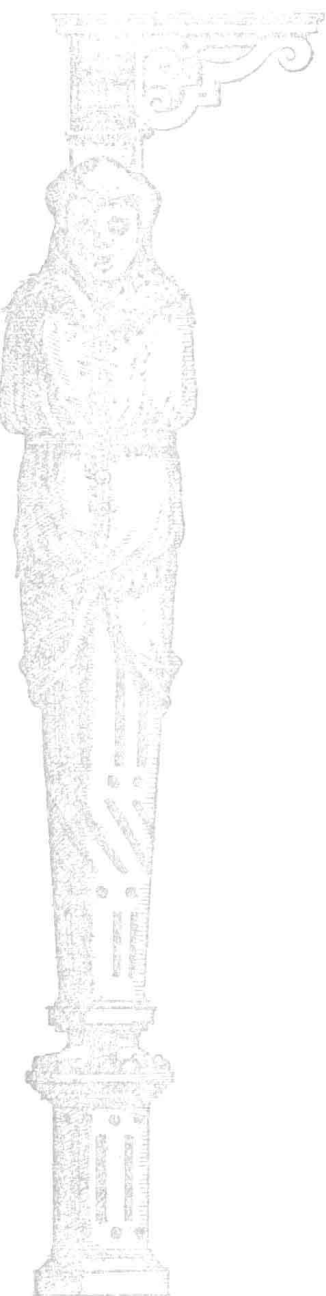
目次

10	悪魔の陽の下に ジョルジュ・ベルナノス
10	序章 ムウシエットの物語
114	第一部 絶望の誘惑
306	第二部 ランブルの聖者
446	ジョルジュ・ベルナノスの生涯と作品——木村太郎





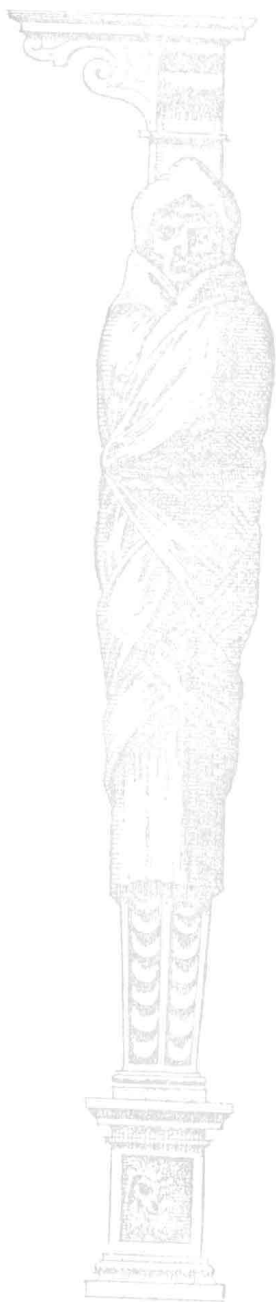
悪魔の陽の下に



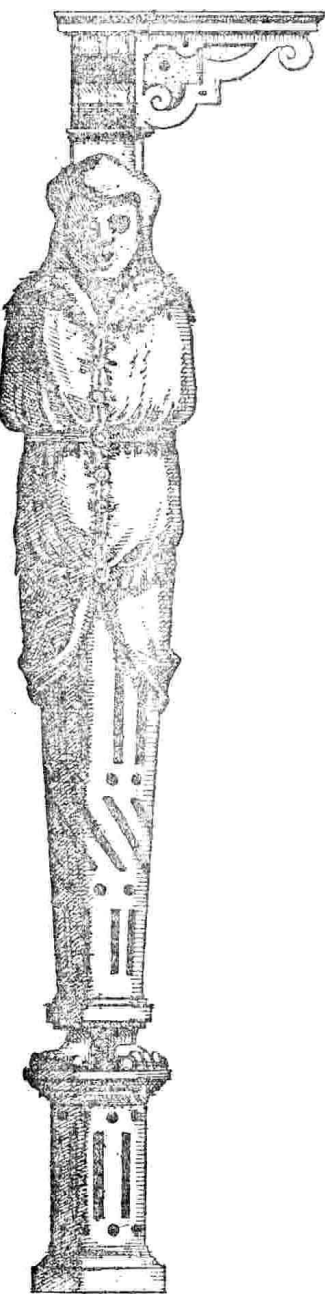
この作品を最初に読んで、
愛してくれた

ロベール・ウアレリ・ラドに献げる

—— ジョルジュ・ベルナノス



序章



ムウシエットの物語

sous le soleil de saïan

第一章

今や詩人ジャン＝ポール・トゥーレの愛した夕暮時である。西の方に象牙色の一団の雲、そして、地から中天までたそがれの空、すでに冷えて来た果てしない曠野——溶けてゆく地平線は水のような静けさに満されている……。今や、香り高く、毒ある、秘められた本質を抽象するために、詩人が心のうちに人生を蒸溜する時である……。

すでに、無数の腕、無数の口を持った人間の群が、闇の中で蠢いている。すでに大通りには人波が溢れ、灯火が燦んでいる……。そして、彼、トゥーレは、大理石の卓に肘をついて、百合の花のように立昇る夜気を眺めている。

それは、アルトワ県テルナンク町のジェルメーヌ・マロルティの物語の始まる時である。彼女の父は、ブーロネー地方のマロルティ家の一人で、この一家は代々製粉業を営み、いわば同じ粉から出た人間どもであり、麦の一袋から出来るだけ余分の麦粉をひねり出そうと努める人間どもだったが、しかも商売にかけては太っ腹で、結構裕福に暮らしていた。ジェルメーヌの父の代になって

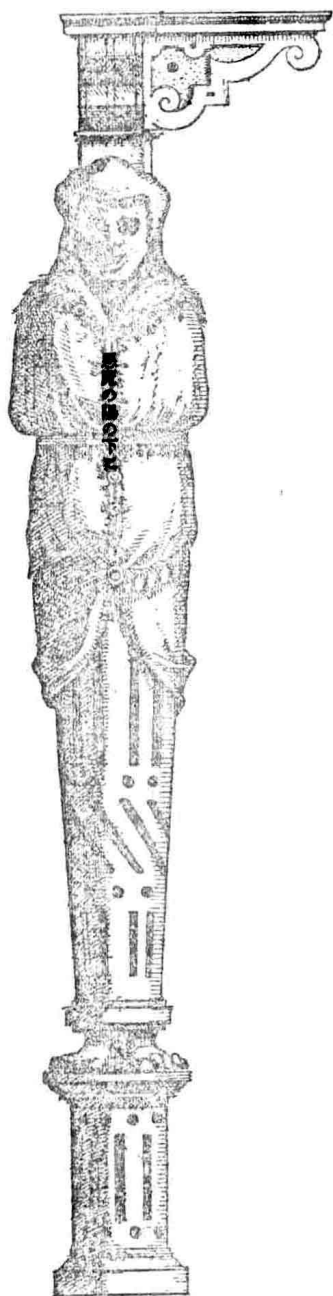
初めてカンバーニュに引移り、そこで結婚し、小麦を裸麦に乗りかえて、政治と麦酒醸造に手を出したが、どちらもあまり芳しくはなかった。それ以来、ドゥーヴルやマルキーズの製粉業者たちは、彼を、誰からも正当な利益しか求めぬ商人の面汚しをしたあげくの果てが、末はどうせ藁の上で果てる危かしい狂人扱いしていた。「わしたちは代々自由主義者だった」といつも彼らは口にしてはいたが、それはつまり、自分たちはどこまでも一点非の打ちどころのない商人だという意味だった……。というのも、時は皮肉なはずらをするもので、過激思想家の子孫が案外穏健な人物ばかりだからである。今では、ブランキの精神的後裔が登記所に群れ、司祭の支度部屋をラムネーのそれが満たしているのである。

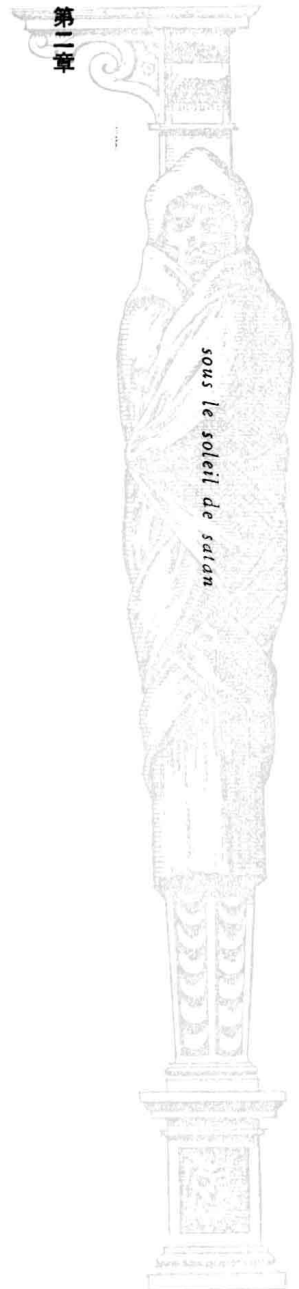
カンバーニュ町には、いわば二人の領主がいた。ラスバイユの日禱書で養われた代議士で開業医のガレ。運命によって置かれた高所から、彼は、いまだに郷愁に駆られながら、町人生活の失われた楽園、彼の陰気な小さい町、彼の虚無によって満たされている緑色のレプス布張の家具のある彼の家のサロンを眺めている。彼は、自分こそは社会秩序と所有権を脅かす人間、と正直に思い込み、それを悔み、口を噤むか、それとも、いつも控え目に話すことで、それらのものの終焉をいくぶんでも遅らすことができるか、と考えていた。

「わしは誤解されとる」と、この亡霊は、或る日傷ましいばかりに真剣な調子で叫んだ。「ねえ、わしにだって良心はあるよ」一方、ドゥ・カディニャン候爵は、同じ土地で、王国なき王の生活を送っていた。『ゴローワ』紙の社交界便りや『両世界』誌の

sous le soleil de satan

政界便りで社会の動きに遅れまいとしながらも、しかもなお、今は忘れられた鷹狩をもう一度フランスに復興させようという野心を懷いていた。だが、不幸にも、大金を投じて手に入れた由緒ある諾威の鷹どもが、彼の期待を裏切って、鼠入らずの食物を掠めとったために、彼はこれらチュートンの騎士たちの頸を捻り、その後は、より慎ましかに、雲雀や鵲狩用のはいたか鵲を仕込んでいた。そして、その合間には狼狩もやっていた。いや、少くともそういう噂だった。というのは、この男、狼のように途々声を立てず、こっそり密猟をやるので、口さがない連中も、せいぜい陰口を叩くぐらいが関の山だったからである。





マロルティは妻との間に一人の娘をもうけた。この娘を、彼は最初、共和政への忠誠を表明するために、リュクレースと名づけようと望んだ。この徳高い婦人をグラキウス兄弟の母と取違えた町の小学校教師は、得々として一席弁じ立て、すでにヴィクトル・ユゴーもまた彼に先立ってこの偉大な追憶に敬意を表していることを想起させた。従って仏国の戸籍簿はもはやすでに一度この光榮ある名によって飾られたことがあるのである。だが、不幸にも、躊躇に駆られた教会の主任司祭は大司教の意見を待つように言い、とどのつまりは、血気にはやる麦酒醸造業者も、ついに心ならずも、娘がジェルメーヌの名で洗礼を受けることを承知しなければならなかった。

「これがもしも男の児なら、あとへは引かんのだが」と彼は言った。「なんせ、娘っこでは……」

その娘が今は十六になっていた

或る宵のこと、ジェルメーヌは、夕餉時、搾りたての牛乳を一杯入れたバケツを下げて、土間へ入って来た……。しきいざわから一、二歩のところで急に立止まり、しゃがみ込むと、みるみる顔が蒼ざめた。

「やれやれ！」とマールティは叫んだ。「チビめがへたばりおったぞ！」

娘は下腹に手を当てて、ぼろぼろ涙を流した。母親の鋭い視線が娘の視線と出合った。

「ちよつとあっちへいってておくれよ、お父つつあん！」と母親は言った。

よくあるように、それと打ち明けられぬ漠然とした数知れぬ疑惑のあとで、突然明白な証拠が現われたのである。嘆願、脅迫、打擲さえも、強情な娘からは、子供じみた涙しか引出すことはできなかった。たとえどんなに智恵の浅い女でも、こうした重大な場合には、疑いもなく至高の本能にはかならぬ落着き払った冷静さを示すものである。男があわてる場合、女は口を噤む。好奇心を刺激することで、怒りをはぐらかすことを女は知っているのである。

だが、それから一週間ほどして、マールティは、パイプを燻らしながら、妻に言った。

「あすは侯爵のところへいってくる。わしにや考えがある。大体見当はついてるんだ。」

「侯爵のところへだつて！…… アントワーヌ、いい気になると、しくじるよ。なんにも知りもしないくせにさ……。鼻であしらわ

悪魔の陽の下に